

保育者養成校における学生の食育への意識と関心

高妻瑠弥乃*・小林如乃**

Awareness of and interest in nutrition education among students at a childcare worker training college

Rumino KOUZUMA, Yukino KOBAYASHI, PhD

1. 研究の背景と目的

わが国の経済成長に伴う国民の生活水準の向上は、人々のライフスタイルの多様化をもたらしたが、このような社会の変化は価値観の変化にもあらわれ、一方で食を大切にする心や古くから伝承されてきた伝統的な食文化の消失にも繋がっている。また、生活様式の変化は、不規則な食事や栄養バランスの偏りによる生活習慣病の増加、ひとりで食事をする「孤食」や朝食の欠食の増加、食品偽装を始めとした食の安全や食の海外依存など様々な問題を引き起こしてきた。こうした食を取り巻く問題が増加したことを背景に、食育に関する施策の推進を目的として 2005 年 6 月に「食育基本法」¹⁾が制定された。食育基本法の前文においては、食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付け、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することを求めている。このことからわかるように、健全な食生活は、ひいては心身の健康にも結びつく重要なものである。また、本法第 16 条では、農林水産省に設置される食育推進会議において、食育推進基本計画を作成することと定められ、これに基づき、5 年毎に食育の推進に当たっての基本的な方針や目標を掲げるとともに、食育の総合的な促進に関する事項として取り組むべき施策等を提示した「食育推進基本計画」²⁾が制定された。この取り組むべき施策には、基本的な方針としての 5 つの重点課題（若い世代を中心とした食育の推進、多様な暮らしに対応した食育の推進、健康寿命の延伸につながる食育の推進、食の循環や環境を意識した食育の推進、食文化の継承に向けた食育の推進）が定められている。

就学前の子どもに対する食育は、2018 年 4 月 1 日から適用された「保育所保育指針」³⁾のなかで、保育所での「食育」は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標であるとしている。また、その食育は、子どもが生活と遊びの中で、意欲をもって

* 宮崎学園短期大学保育科

** 昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座

食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであり、保護者や地域の多様な関係者との連携及び協働の下で実施することとされている。2017年に策定された、保育士として必要な知識及び技能の修得、維持及び向上を目的とする「保育士等キャリアアップ研修ガイドライン」⁴⁾では、「食育・アレルギー対応」分野が専門分野別研修の6つの分野のうちの1つとして位置付けられ、「食育・アレルギー対応」に関するリーダー的職員の育成も図られている。

横浜市が行った調査⁵⁾では、食育について、「食育計画を作成している」「保育課程／全体的な計画と年間指導計画に盛り込んでいる」と回答した施設は、市立保育所では100%、民間保育所、地域保育事業では99%、幼保連携型認定こども園では94%、幼稚園型認定こども園では100%となっている。また、食育計画について制作にかかわる職種が各施設とも「施設長・園長」、「保育士・保育教諭」、「管理栄養士・栄養士」、「調理員（師）」が80%以上であり、施設全体で多職種にわたり協働して食育にかかわっていることがわかる。このように、食育に積極的に取り組む自治体や保育施設が多く存在し被食育経験のある若者が一定数いることと、これまでの内閣府の調査⁶⁾や先行研究^{7),8)}によると食育に関心のある若者がいずれも8割を超えることから、保育者養成校入学後の若者についても被食育経験を有し、なおかつ食育への意識が高いのではないかと考えられる。その一方で、自身の健康を心掛けている現職の保育士は半数に満たず、食育に関心を持たない保育士も約3割を占める⁹⁾。しかし、保育所における食育の働きかけは、職員が連携して実施することが求められていることから、栄養士や調理員の専門性に頼るだけでなく、保育者養成の段階から食に対する正しい知識と食意識を保育者自身が認識していく必要がある。

現場で働く保育者の食育活動の実践や意識を検討した先行研究^{10),11)}はこれまでに報告されているが、保育者養成の段階で学生を対象とした食育に関する調査や研究は十分とは言えず、小学校の教員や栄養士課程の学生を対象としたもの等に留まっており^{7),12)}、保育者養成の段階で学生を対象とした食育に関する調査や研究は散見されるものの数少ない¹³⁾。そこで、本研究では保育者養成校の学生が食育にどのような認識や意識を持っているかを明らかにし、保育者養成校における食教育の在り方を検討した。

2. 方 法

(1) 対象者および調査方法

調査は宮崎県にある短期大学保育科のうち保育士資格取得を目指す2年次学生195名を対象に、Universal Passportを用いたウェブアンケートを行った。調査票には、本調査の主旨、方法、個人情報の保護、本調査で得られた情報の目的以外の使用はしないこと、協力は自己の自由意志によって決定されること、協力の途中離脱が可能であること、同意の有無による不利益や回答内容による不利益を受けることがないこと、調査に協力した場合の権利保護を記載した。調査は2021年4月から2022年2月までの間に計3回実施し、回収された各アンケートのすべてに回答が得られたものを有効回答とした。その結果、対象数は144名、有効回答率は73.8%であった。

本研究は、宮崎学園短期大学の人を対象とする研究に関する倫理審査会に申請し、承認されている（承認番号2021014）。

(2) 調査内容

調査内容は、回答者自身の食育への意識と認識について8項目、回答者自身の生活習慣について1項目、回答者自身の食に対する意識について3項目の内容とした。

①食育への意識と認識（8項目）

保育者養成校に入学してから食育についてどのような意識があるか、これまでどのような食育を受けてきたのか、保育者となった際に子ども達に食育を実施したいか、またその場合に不安を感じるかについて質問した。

回答者自身の食育への意識として、学生が2年制の保育者養成校に入学してからの最初の1年間で食育について意識したことがあるかという質問項目を設定し、「はい」「いいえ」の2段階で評価した。なお、この質問項目の変数名は「養成校入学後の食育への意識」とした。また、養成校入学後に食育を意識したかの有無にかかわらずその理由について自由記述でたずねた。

これまで受けた食育については、過去に食育を受けたことがあると認識しているかを「受けた」「受けていない」「わからない」の3段階で評価し、この質問項目の変数名を「被食育経験」とした。また、過去に食育を受けた場合の内容についての自由記述、幼児期における楽しかった食育の思い出についての有無と自由記述で評価した。なお、幼児期の楽しかった食育の思い出の有無についての質問項目の変数名は「幼児期における楽しかった被食育経験」とした。

保育者となった際の子どもたちへの食育実施についての意識は、保育施設における食育への関心を「とてもある」「どちらかというところにある」「どちらかというところはない」「まったくない」の4段階、保育者養成校卒業後に保育者となった場合に食育を実施したいかを「実施したい」「実施したくない」「わからない」の3段階、実施したい場合はどのような食育をしたいかの自由記述、食育をすることへの不安があるかについては「不安がある」「不安はない」「わからない」の3段階、食育をすることへの不安の具体的な内容について8の選択肢から複数回答と自由記述で評価した。なお、回答者の保育施設における食育への関心についての質問項目は「保育施設における食育への関心」という変数名に、養成校卒業後に保育者となった場合に食育を実施したいかの質問項目を「保育者としての食育実施の意欲」という変数名に設定した。

食育への不安感について問う8の選択肢は、『『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』（概要）¹⁴⁾と久保ら¹⁵⁾を参考に作成した。第一筆者は、管理栄養士として複数年以上の勤務歴を有し、食育の実施経験が豊富である。

②生活習慣に対する意識（1項目）

回答者自身が日常的に正しい生活習慣を送るよう気に掛けているかを、「とてもあてはまる」「どちらかというところにあてはまる」「どちらかというところにあてはまらない」「あてはまらない」の4段階で評価した。なお、この質問項目の変数名は「自身の生活習慣への意識」とした。

③食に対する意識（3項目）

回答者自身が食事を楽しんでいるかについて「とても楽しい」「楽しい」「あまり楽しくない」「楽しくない」の4段階、日頃の食事に対する意識で当てはまるものを12の選択肢から複数回答、食への意識に影響を与えた人やものを8の選択肢と自由記述で評価した。日頃の食事に対する意識について問う12の選択肢については、「食生活指針」¹⁶⁾を参考に作成し、自身の食への意識に影響を与えた人やものについては和泉ら¹⁷⁾を参考に作成した。なお、これらの質問項目について変数名を、回答者自身が食事を楽しんでいるかについてを「食事の楽しさ」とした。また、選択肢を多く回答したものほど日頃の生活の中で食に関する様々な事象を多岐に渡り意識していることが示されていると考え、日頃の食事に対する意識の選択肢の回答数を「日頃の食意識」とした。

(3) 解析方法

解析に用いた統計手法：

養成校入学後の食育への意識、被食育経験、幼児期における楽しかった被食育経験、保育施設に

おける食育への関心，保育者としての食育実施の意欲，自身の生活習慣への意識，食事の楽しさ，日頃の食意識について，各変数間の関連を検討するために相関分析を行った．また，過去に被食育経験がある場合に，養成校入学後の食育への意識に差があるかを検討するために，被食育経験と養成校入学後の食育への意識について χ^2 乗検定を行った．さらに，食事の楽しさの自身の生活習慣への意識への影響を検討するために，食事の楽しさを説明変数とし，自身の生活習慣への意識を目的変数として単回帰分析を行った．

なお，統計解析には，JMP Pro Ver.16 を用いた．

3. 結 果

相関分析の結果（Spearman の順位相関係数）を Table.1 に示す．被食育経験と保育施設における食育への関心，保育施設における食育への関心と食事の楽しさ，保育施設における食育への関心と日頃の食意識，食事の楽しさと日頃の食意識の間に有意な相関が認められた（それぞれ， $p<.05$ ， $p<.01$ ， $p<.05$ ， $p<.01$ ）．また，「幼児期における楽しかった被食育経験」と「自身の生活習慣への意識」，「幼児期における楽しかった被食育経験」と「日頃の食意識」，「保育者としての食育実施の意欲」と「日頃の食意識」，「自身の生活習慣への意識」と「食事の楽しさ」，「自身の生活習慣への意識」と「日頃の食意識」の間の相関に有意傾向が認められた（いずれも $p<0.10$ ）．なお，この各変数に関する記述統計の結果を figure.1-8 に示す（文末に添付）．

被食育経験と養成校入学後の食育への意識のクロス集計表を Table.2 に示す．全体%は各セル（4 つの割合）が示されている（はい×受けた：63.89%，はい×受けていない・わからない：18.75%，いいえ×受けた：13.19%，いいえ×受けていない・わからない：4.17%⇒計：100%）．被食育経験の%の箇所は「養成校入学後に食育について意識したことがある（はい）」と答えた人（119 人）のうち，「77.31%」が過去に食育に関する教育を受け，「22.69%」が受けていない・わからない，「養成校入学後に食育について意識したことがない（いいえ）」と答えた人（25 人）のうち，「76.00%」が過去に食育に関する教育を受け，「24.00%」が受けていない・わからないを表している（養成校入学後の食育への意識%も同様の表示形式）． χ^2 乗検定を行った結果，被食育経験と養成校入学後の食育への意識において有意な差は認められなかった（ $\chi^2(1)=0.020$ ， $p=0.887$ ， $\phi=0.012$ ）．

単回帰分析の結果を Table.3 に示す． R^2 の値からあてはまりがよいとはいえないものの有意な結果が認められた（ $R^2=0.04$ ， $p=0.014$ ）．

4. 考 察

本研究は，保育者養成校の学生の食育に対する認識や意識を明らかにし，保育者養成校における食教育の在り方の現状と課題について検討を行った．

保育者養成校の学生における過去の被食育経験と保育施設における食育への関心の間に弱い正の相関が認められたことから，過去に食育に関する教育を受けた経験がある学生ほど，保育現場で実施されている食育活動への関心が高いということが示唆された．過去にどのような食育を受けたのか具体的な内容についての自由記述では，高校の家庭科の授業と調理実習をあげた学生が最も多く，そのほか中学校での調理実習や地域の食育ボランティアとの交流や，小学生での給食センターや食品工場の見学などがあげられた．学生は養成校在学中から保育および教育実習をとおして保育施設における食育に携わる機会がある．養成校への進学以前から家庭科や課外授業等で食

Table.1 変数間の相関係数

	養成校入学後の食育への意識	被食育経験	幼児期における楽しかった被食育経験	保育施設における食育への興味	保育者としての食育実施の意欲	自身の生活習慣への意識	食事の楽しさ	日頃の食意識
養成校入学後の食育への意識	—							
被食育経験	.027	—						
幼児期における楽しかった被食育経験	.081	.122	—					
保育施設における食育への興味	.047	.202*	.082	—				
保育者としての食育実施の意欲	.046	.044	.016	.064	—			
自身の生活習慣への意識	.118	-.011	.160†	.126	.110	—		
食事の楽しさ	.111	.136	.073	.239**	.019	.151†	—	
日頃の食意識	.054	.112	.154†	.193*	.144†	.155†	.219**	—

Spearmanの順位相関係数
 ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

教育を受けることは、実際に現場で保育者として働きだす前の、例えば保育実習やインターンシップなどの段階から食育への関心を持つことにつながり、それが保育者となった際のスムーズな食育実践者への足がかりとなることが示唆された。

保育施設における食育への関心と食事の楽しさの間に弱い正の相関が認められたが、和泉ら¹⁷⁾は女子大生への調査において、食事を楽しみと感じることやおいしさがわかる感性が食生活を主体的にすすめる原点となると述べている。保育者を目指す学生においても、食事への肯定的な捉え方が、保育現場での食育への関心に繋がっていると考えられる。また、食事の楽しさと日頃の食意識の間に正の相関が認められたことにより、食事を楽しみと感じる学生は日頃の食事を取りまく様々な問題について関心をもち配慮し健全な食生活を主体的に送ろうとしていることが示唆された。日頃の食意識と保育施設における食育への関心との間で、弱い正の相関に準ずる結果が有意に認められたことから、健全な食生活を主体的に送ろうとするだけでなく、他者とも健全で楽しい食生活を共有し伝播していくことに関心を持っている可能性も示唆されたと考えられる。このことは、保育施設において食育活動がどのように展開されているのかについて関心を持つことにも影響していると考えられる。

χ^2 二乗検定の結果からは有意な結果が認められなかった。仮説の段階では、被食育経験があるほど養成校入学後の食育への意識があるのではないかと考えられたが、被食育経験と養成校入学後の食育への意識に関係は見出されず、このことは、過去に受けた食育は必ずしも青年期後期における食育への意識につながるものではないと考えられる。この調査の実施時期は回答者が食に関する授業を受講して間もない頃であり、それまでの1年間で食関連の教育を受ける機会がほとんどなかったことも影響すると推測されるが、食育はあらゆる世代に必要なものであり、生涯にわたって健全な食生活を実践するための基礎となるものであるため、自他にかかわらず食育というものに対して意識を向けるためには大学入学後も継続的に食育を行っていく必要があると考えられる。

単回帰分析の結果からは、食事の楽しさが自身の生活習慣への意識に影響を及ぼしていることが示唆された。ただし、あてはまりのよさを示す数値が高くはなかったことは、自身の生活習慣への意識の質問教示文にある「生活習慣」というものが必ずしも食事に関するもののみを示すものではなく、その他の要因が複数関連しているものと考えられるためという可能性もある。そのため、

Table.2 被食育経験と養成校入学後の食育への意識のクロス集計表

			養成校入学後に食育について 意識したことがあるか		
			はい	いいえ	合計
過去に食育に関することがあるか教育を受けたか	受けた	度数	92	19	111
		全体%	63.89	13.19	77.08
		被食育経験の%	77.31	76.00	
		養成校入学後の食育への意識の%	82.88	17.12	
	受けていない・わからない	度数	27	6	33
		全体%	18.75	4.17	22.92
		被食育経験の%	22.69	24.00	
		養成校入学後の食育への意識%	81.82	17.12	
	合計	度数	119	25	144
		全体%	82.64	17.36	

Table.3 単回帰分析の結果

	標準偏回帰係数	標準誤差	t 値	p 値
切片	1.41	0.30	4.75	<0001***
食事の楽しさ	0.27	0.11	2.48	0.014*

R^2 乗=0.04. RMSE=0.66. n=144
*** $p < 0.001$. * $p < 0.01$

具体的な生活習慣の内容とそれぞれが独立して関連性があるのかも今後の検討すべき課題である
と考える。

「令和 2 年度 食育白書」¹⁸⁾によると、これまでの食育推進基本計画の効果もあり、食育に関心のある国民の割合の増加、食育の推進に関わるボランティア団体等において活動している国民の増加、朝食の欠食率の減少、食育推進計画を作成・実施する市町村の増加等、国民全体の食育への取り組みは改善傾向にある。しかし、農林水産省が 18～39 歳の男女に実施した「若い世代の食事習慣に関する調査」¹⁹⁾によると、栄養バランスに配慮した食生活について 71.8%が健康に良いと認識しているにも関わらず、実際に、主食・主菜・副菜を組合せた食事を取り栄養バランスに配慮した食事を毎日食べている人は 24.4%に留まった。この調査から明らかになったように、栄養バランスに配慮した食生活に対して肯定的なイメージを持つ若者が多くいる一方で、その栄養バラ

ンスに配慮した食生活を日々の生活において実践する若者の割合は低く、高妻²⁰⁾によると保育者養成校においても 4 割弱の学生が日頃から自分の食事の栄養バランスを意識しているが、意識をしていない学生は 6 割を超えた。上村ら¹²⁾によると、食育に関心のない女子学生は健康状態・生活習慣・食習慣が望ましくないことが明らかになっている。

保育所での栄養士配置は法律で義務付けられておらず、児童福祉法に基き定められた児童福祉施設最低基準において「保育所には、保育士、嘱託医及び調理員を置かなければならない」と定められているのみで²¹⁾、調理員の配置は義務付けられているが栄養士は必ずしもすべての保育所に配置されているわけではない。しかし「保育所保育指針解説」²²⁾においては、食育を保育の一環として位置付け、各保育所において創意工夫を行いながら食育を推進していくことを求めている。乳幼児期にふさわしい食生活の展開と適切な援助が行われるよう食育計画を作成し、評価及び改善に努めるよう定める一方で、保育所の栄養士は必置ではなく、食育を指導できる職員が十分に配置されているとはいえない保育所も多く存在する。西尾ら²³⁾の調査では、栄養士の配置されている保育所は全体の 7 割弱に留まり、栄養士の配置がある園では配置のない園よりも食に関する各種の取り組みが多く、特に食教育や食事相談において栄養士の配置がない園での取り組みが少ないことが明らかになった。

このように、栄養士が配置されていない保育所においては栄養士が業務として行うような入所児の栄養状態の把握から保護者への食に関する相談・助言、給食の試食会やクッキング体験の機会設定などの様々な食育計画に基づいた食育を、保育者が主体となって展開していく必要がある。このことは、保育者養成校を卒業し保育者として働き出したばかりの新任保育者においても同様であり、特に食物アレルギー児への対応や摂食機能に障がいがある子どもへの対応についての知識習得は、事故防止の観点からも卒業後比較的すぐに子どもの食育に携わることになるであろう学生にとって重要な課題となる。

幼児期に受けた食育の経験について、79.2%の学生が楽しかった経験があると回答している (figure.3)。この時期に受けた食育は成長してからも楽しい経験という肯定的な食のイメージとして記憶に残るものであり、被食育経験が保育施設で実施されている食育への関心にも影響を及ぼすことから、幼児期の食育への取り組みは将来食育を行う側の立場となる保育者の養成にとっても重要であることがわかる。また、学生の 91.0%が実際に就職して保育者として働きだしてから食育を実施したいとの意欲をもっている (figure.5) が、一方で自分が保育施設において子どもに食育を行うことへの不安を感じている学生が、わからないと回答した学生と合わせて 79.2%という結果になった (figure.9)。この食育を行うことへの不安については、具体的な不安の強さの程度や内容、食育実施への意欲との関連性を探ることを今後の課題としたい。

保育者養成課程では「子どもの食と栄養」が保育士資格取得のための必修科目として設けられているが、保育者を目指す学生が現場に出たときに早期から食育実践者となり得るためには養成課程の段階から保育施設での食育に関心をもつことが主体的な学びを促すものであると考えられる。そのためには、分野固有の専門知識の教授のみならず、食教育として学生本人の日頃の食事への意識や生活習慣に対する意識の改善、食事を楽しみと感じられるような豊かな食生活を送るための支援をすることの重要性が示された。

5. 結 語

本研究では保育者養成校の学生が食育にどのような認識や意識を持っているかを明らかにし、保

育者養成校における食教育の在り方を検討した。

その結果、過去に食育に関する教育を受けた経験がある学生ほど、保育施設で実施されている食育活動への関心が高いことが示された。食事に対して肯定的に捉えている学生ほど、保育施設での食育への関心が高いことが示唆された。また、日頃の食意識が高い学生ほど、食事の楽しさや保育施設における食育への関心が高いことも示された。さらに、食事の楽しさが自身の生活習慣への意識に影響を及ぼしていることも明らかとなった。このことから、保育者養成課程における食教育は、専門知識のみならず学生本人が日頃の食事への意識や生活習慣に対する意識の改善、食事を楽しみと感じられるような豊かな食生活を送るための支援をすることが重要である。その一方で食育を実施することへの不安も確認されたことから、学生の食育への不安感を払拭できるような授業を構成する必要性が示された。

謝 辞

調査にこころよくご協力くださいました対象者の保育者養成校の学生の皆様に感謝いたします。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

文 献

- 1) 「食育基本法」(2005) 法律第 63 号.<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=417AC1000000063> (2022 年 2 月 21 日アクセス) .
- 2) 内閣府「第 1 次食育推進」(2006) https://www.maff.go.jp/j/study/tisan_tisyo/h18_01/pdf/data11.pdf (2022 年 3 月 14 日アクセス)
- 3) 厚生労働省 (2017) 「保育所保育指針」厚生労働省告示第 117 号.https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1 (2022 年 2 月 21 日アクセス) .
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長 (2017) 「保育士等キャリアアップ研修の実施について」 雇児保発 0401 第 1 号.<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/tuuti.pdf> (2022 年 2 月 10 日アクセス) .
- 5) 横浜市「保育・教育施設等における食育に関する調査」(2021) <https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/hoiku-yoji/kyuusyoku/20160205143926.html> (2022 年 2 月 12 日アクセス) .
- 6) 内閣府 (2017) 「平成 29 年度 第 1 回青少年意見募集事業 Web 上での意見募集結果」<https://www8.cao.go.jp/youth/youth-opinion/report/pdf/h29/1st.pdf> (2022 年 2 月 12 日アクセス) .
- 7) 上田 由喜子, 小橋 麻衣, 山下 治香, 田中 都子, 細田 耕平 (2014) 「教員志望学生の食育に対する意識」日本食育学会誌, 第 8 巻, 第 3 号, pp.181-189.
- 8) 平化恵美子 (2014) 「食育に関する女子短大生の意識について」甲子園短期大学紀要, Vol32, pp.81-85.
- 9) 上杉 宰世, 稲葉理恵子 (2013) 「保育所における食育活動の現状と栄養士の関わり」大妻女子大学家政系研究紀要, 第 49 号, pp.55-62.

- 10) 清水陽子, 中野博子, 坂手誠治 (2017) 「保育士における食育の課題～保育士と保育学生の認識の違いからみた検討～」日本食育学会, 第 11 号, 第 3 号, pp.229-238.
- 11) 高橋比呂映, 平本福子 (2021) 「保育所等の食育内容における保育士と栄養士による認識の違い」生活環境科学研究所研究報告, 第 53 巻, pp.51-57.
- 12) 上村芳枝, 北林佳織, 遠藤奈々, 森田 清美 (2015) 「女子学生の食育の関心度と健康状況・生活習慣・食習慣との関連」比治山大学紀要, 第 22 号, pp.151-162.
- 13) 坂井 莉野・高島 裕美 (2018). 領域「健康」のねらい及び内容に即した保育者養成校における指導の課題と可能性——学生の食生活の実態と健康に関する意識調査の結果から—— 拓殖大学北海道短期大学研究紀要 創立 50 周年記念号, 20-40.
- 14) 厚生労働省 (2004) 「『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』(概要)」雇児保発第 0329001 号 <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/dl/s0604-2k.pdf> (2022 年 2 月 14 日アクセス) .
- 15) 久保加織, 松本和也 (2020) 「大学生の食行動に影響を及ぼす意識構造」日本食育学会誌, 第 14 巻, 第 2 号, pp.115-122.
- 16) 文部科学省, 厚生労働省, 農林水産省 (2000) 「食生活指針」(2016 年一部改定) .
- 17) 和泉 眞喜子, 鈴木 道子, 千葉 元子, 角田 由希, 太田 健児 (2012) 「女子大学生の食意識, 健康感, 調理実践等に及ぼす大学における食教育の影響」日本食育学会誌, 第 6 巻, 第 1 号, pp.51-59.
- 18) 農林水産省 (2021) 「令和 2 年度 食育白書」(令和 3 年 5 月 28 日公表) .
- 19) 農林水産省 (2019) 「若い世代の食事習慣に関する調査」 .
- 20) 高妻瑠弥乃 (2021) 「食育を学ぶ学生の食に対する意識と実践力」宮崎学園短期大学教育研究, 第 17 号, pp.67-70.
- 21) 厚生労働省「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」1948 年厚生省令第 63 号, 2020 年改正, <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=323M40000100063> (2022 年 2 月 26 日アクセス)
- 22) 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf> (2022 年 2 月 25 日アクセス)
- 23) 西尾久美子, 佐藤理紗子, 小塚美由記, 杉村留美子 (2013) 「保育所における「食」に関する現状と 栄養士への要望についての研究」北海道文教大学研究紀要, 第 37 号, pp.9-16.

Abstract

In this study, we clarified the awareness and interests of students at a childcare worker training college toward nutrition education, and examined the nature of nutrition education in childcare worker training college.

The results showed that students who had received education on nutrition education in the past were more interested in nutrition education activities implemented in childcare settings. The results suggest that students who have a positive attitude toward food are more interested in nutrition education in childcare settings. The results also indicated that students with a

high awareness of food on a daily basis were more interested in the enjoyment of meals and in nutrition education in childcare facilities. In addition, it was found that the enjoyment of eating influenced students' awareness of their own lifestyle.

Therefore, it is important that nutrition education in childcare training programs not only provide specialized knowledge, but also support students in improving their awareness of daily meals and lifestyle habits, and in developing a rich dietary life in which meals are enjoyable.

On the other hand, it was confirmed that some students are anxious about nutrition education, indicating the necessity of structuring classes to dispel students' anxiety about nutrition education.

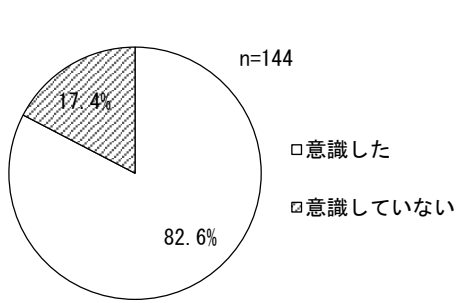


figure.1 養成校入学後の1年間で食育について意識したかについて

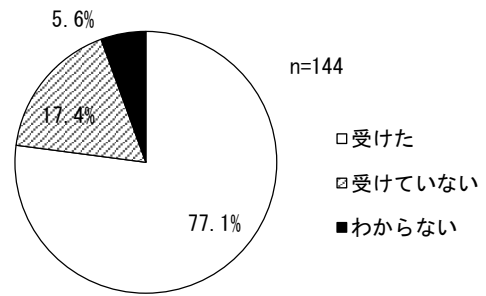


figure.2 過去の被食育経験への認識について

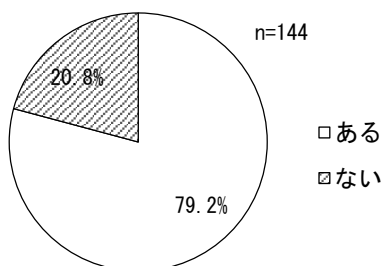


figure.3 幼児期の楽しかった食育経験の有無について

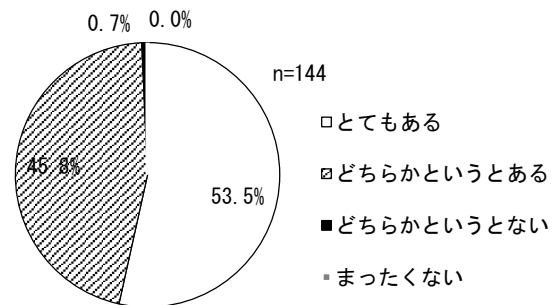


figure.4 保育施設での食育への興味について

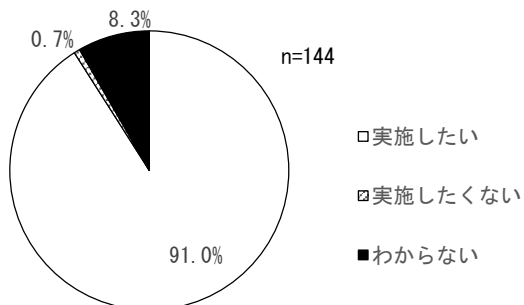


figure.5 保育者となった場合の食育実践への意欲について

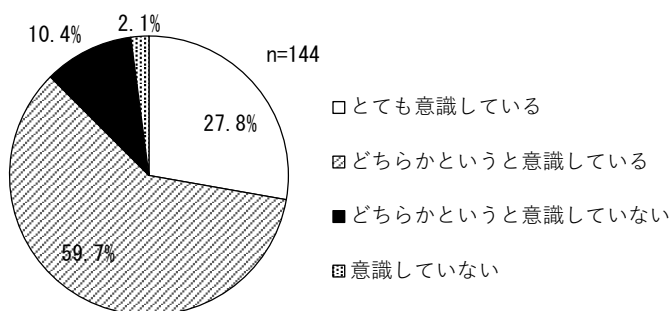


figure.6 日頃、正しい生活習慣を送ろうとしているかの意識について

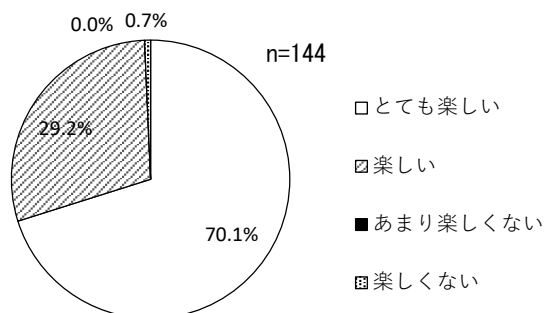


figure.7 食事を楽しいと感じているかについて

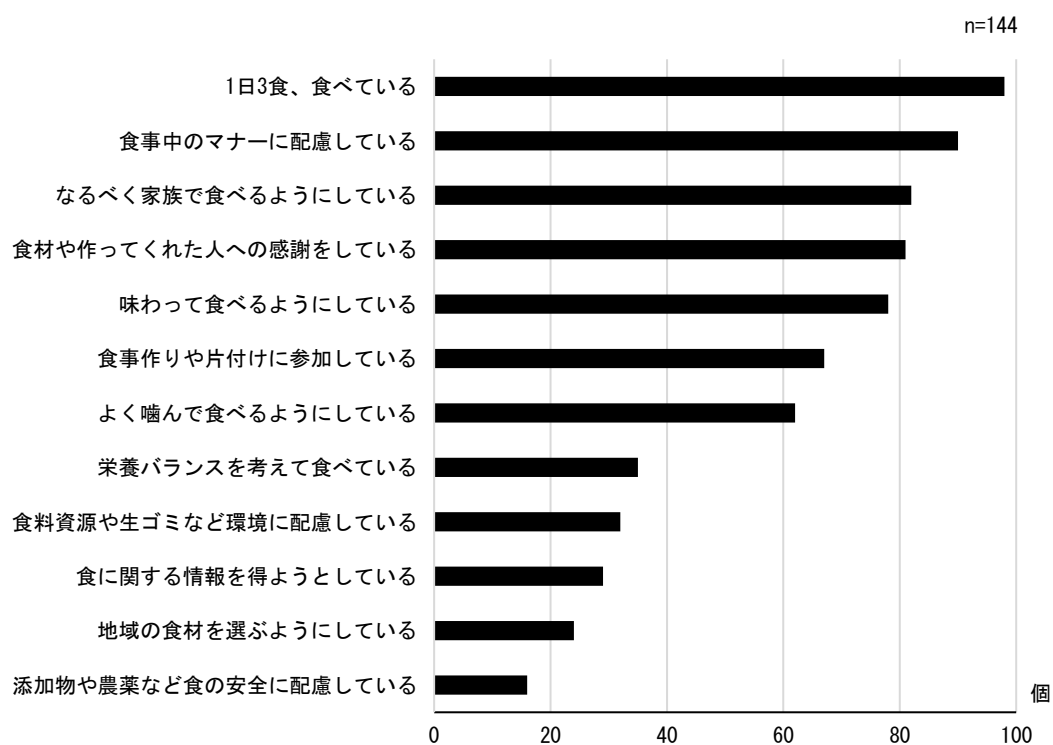


figure.8 日頃の食事への意識で当てはまるものについて（複数回答）

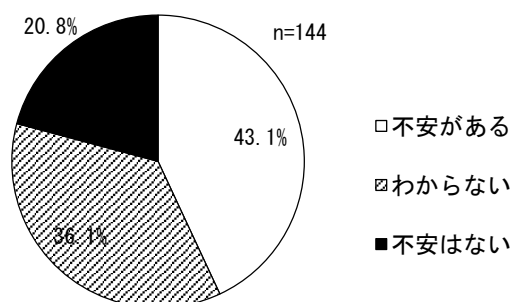


figure.9 食育を行うことへの不安について